



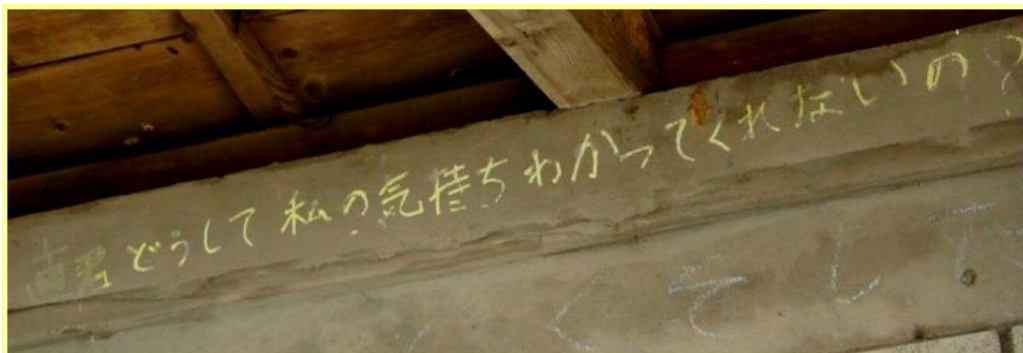
特集「無人駅叙景」

駅舎に刻まれた青春のつぶやき

函館からやってきた東室蘭午前2時すぎ発の夜行列車に乗り込み、苫小牧駅で日高本線に乗り換え、終点様似駅で下車。汗たらたらで日高山脈のアポイ岳(810m)山頂にたどりつくと、体にしみ込んでいたアルコールはすっかり消えうせ、爽快気分で360度の景色に目を見張ったのは20代半ば、青春と真ん中のころだった。

その日高本線にある大狩部駅の屋根を支える梁に、黄色いチョークでこう書かれていた。

「〇君 どうして私の気持ちわかってくれないの？」



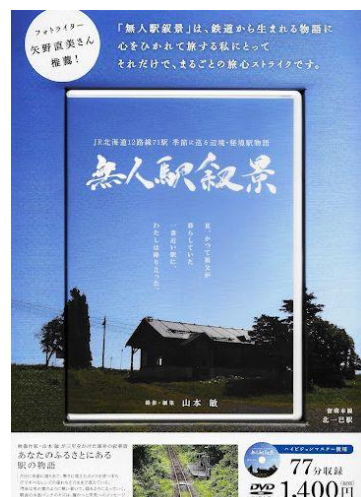
書きなぐったのは、恐らくこの駅から通学する女子高生だろう。〇君は幼馴染か、それとも通学列車内で見染めた別の高校に通う男子高生か。周囲の隙をみて「好きです」と告白したのか、それともラブレターをそっと手渡したのか。結果、

なしのつぶてに、ならぬ堪忍の詰問となったの？ このワン・フレーズだけで、チョークを手にした女の子の、ちょっぴり怒りをにじませた表情が浮かんでくる。

富川駅から5つ目の、コンクリートブロックで囲ったこの駅舎を、実際に自分が訪れたわけではない。梁の文言は、登別映像機材博物館館主で映像作家の山本敏氏が撮影、編集したDVD「無人駅叙景」の1シーンだ。やがて無人のホームに、押し黙るように入ってきたディーゼル車が停車する。その向こうには日高海岸の波濤が広がり、画面は哀調を帯びた潮騒とともにフェードアウトする。

「無人駅叙景」は北海道の12路線71の無人駅を、山本氏が本業の合間を見つけては撮影に足を運び、3年の歳月をかけて収録、編集した辺境・秘境駅物語だ。カラー77分の映像作品が発売されたのは、8年前の平成25年8月1日。つまり、撮影時期の足掛け3年はそれ以前ということになる。春夏秋冬、四季の移ろいとともに映し出された駅の中には、もちろん知名度全国区の秘境駅、室蘭本線の小幌駅も含まれている。

ちなみに収録されている71駅のうち、この8年間で「無人駅」から「廃止駅」に転じたのはいくつか、数えてみたら、なんと、半分以上の37駅に**廃**のハンコが押されていた。記憶に新しいところでは2015年の土砂流失で鶴川一様似間が不通となり、今年4月1日をもって鶴川駅以南、様似までの運輸営業が廃止された日高



本線がそれ。「無人駅叙景」には厚賀、大狩部、蓬栄、本桐、絵笛の5駅が収められているが、壊すには簡単そうなそれらの駅舎も、すでに姿を消したのではあるまいか。さらに1年前の2020年5月に廃止された札沼線の6駅など、それぞれに個性を持った駅舎のたたずまいも、このDVDなどで再見するしか、手立てはないのだろう。

テレビ番組やCM、映画撮影など、ムービー・カメラマン一筋に50年歩んできた山本氏は、奇しくも40代のころ、民放番組制作のため重さ10キロはあるカメラ機材を担いでアポイ岳に登ったという。「あの頃はまだ若かった」と感慨にひたる。そして「無人駅叙景」を手につぶやいた。「このDVD、あと10年もすればレアものになるんだけどな」

購入希望の方は、おじさんズ3号 (TEL 090-9436-3587) までご連絡を

ポロト湖畔、近景遠景

「ゴールデンカムイ展を見に行きたい」という家人の声を受け、開設2年目に入った隣マチの民族共生象徴空間ウポポイに初めて出掛けた。

もう40年も前の話になるが、白老の一人支局時代、ウポポイの前身ともいえるアイヌ民族博物館にちょくちょく取材で出入りしていた。あの頃は入口に強化プラスチック製だったか、巨大なコタンコルクル（村おさ）像が据えられ、過激派による像の爆破予告めいたウワサ話に財団関係者が戦々恐々としていた。踊り広場の向かい側では、職員でのちに大学の先生になったOさんが、格子状に組んだ丸太に数十匹の鮭の皮を天日干ししていた。民族伝統の鮭皮靴・チェプケリ作りへの挑戦だったが、「これが、なかなか難しいのよ」と、ぼやいていたのを思い出す。

その完成品が、博物館の展示コーナーに飾られていた。O氏が苦労して作ったものだったか、別物か、説明文からは読み取れなかった。



あの当時は行われていなかった気がする丸木舟の解説と操船実演が、2人の若い男性職員によってポロト湖畔で行われた。岸边から器用に櫂1本だけで漕ぎ出す若者と、舟の材質やつくり方、バランスの操船テクニックなどを説明する若者の姿に、なにやら隔世の感を覚えた。



実演が終わると、つい解説役の若い職員に声をかけてしまった。

「アイヌの人達が漁に出掛けて、『海の上をぶらぶらする』っ

ているのを知ってる？」

「いいえ」の返答に、意地悪な質問をしてしまったかと二の句を躊躇したが、お節介は止まらない。登別市立図書館ホームページに載せた佐藤三次郎の北海道幌別漁村生活誌の一読を勧めた。

果たして、あの若者は私のオスヌメ本を手にしたのだろうか。

そして、支局時代に親切に取材対応してくれた財団の長老が今も生きていたなら、あまりにデカイ国立博物館への生まれ変わりように、どんな声を上げるだろうか。施設の内外を見学しながら、当時のコタン風景が幾度か蘇った。

枯木に成り果て候

昨年暮れから、本来なら切り捨てるニンジンと大根の頭部の成長ぶりを毎日写真に収めMy ホームページに載せてきたが、6月にカスカスの環礁状態になった人参は、8月4日をもって記録撮りをやめ、永のお別れとなった。



大根の方はニキョニョキ伸びた葉っぱも黄色く変色して枯木となり、ついに終戦記念日の8月15日には、島から根っこが分離してしまった。写真は、屏風代わりの画用紙に幹（と云っていいのかわからない）を立て掛け、写した一枚。生きているのか、仮死状態か、既に永眠のミイラとなったのか、いずれにせよ、ここが潮時と埋葬した次第。

それにしても、野菜の逞しい生命力をこの目で確かめることが出来た日々だった。

薫風 烈風

▶ 今月発行の「文芸のぼりべつ40号」に、創作とは別に今田角蔵の筆名でシナリオ「国定教科書不採用必定 続浦島太郎」を投稿した。「こんな笑いを誘う作品があってもいい」とのお声も頂いた。さらに「続かぐや姫」や「続桃太郎」も作っては一とのリクエストもあった。ペンネームの隠し言葉「今だ、書くぞ」の気持ちになったら、やります。

▶ 今後使うことはないだろうと、かなり前に壊してしまった大型紙芝居用の木枠箱（専門用語では舞台というらしい）を再度、製作中だ。8月下旬に地元の子ども劇場が公園で開くフェスティバルで、昔風紙芝居を実演してほしいとのオファーあり。当日の様子は次号でお知らせする予定。

▶ もうひとつ、出番のない代物があった。小学2年の孫娘が「野球のバット代わりにする棒のようなもの、ない？」というので、広島カープの叩くメガホンを押し入れから引っ張り出した。下の弟たちも含め3人に1本ずつ「カープのファンになってくれ」と条件付きでプレゼントした。彼らの母親、つまり私の娘は、小さい頃から義理の姉に洗脳され阪神ファンになってしまった。ゆえに今のうちから、カープ愛の後進育成へ種まき中だ。では、皆さま、お元気で～。